



Title	日本語と中国語における「感謝の言語行動」の対照研究
Author(s)	李, 華勇
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50573
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (李 華 勇)

論文題名 日本語と中国語における「感謝の言語行動」の対照研究

論文内容の要旨

対照言語学は言語と言語の対照研究を通じてそれぞれの言語の特性を明らかにし、また、言語の本質を捉えようとする言語学の一分野である。対照研究は、主にそれぞれの音声と音韻、文法、語彙、言語行動などを研究対象とし、その中でも言語行動の対照研究は対照言語学領域の重要な分野として注目されている。

言語行動はメッセージを伝える道具であるだけでなく、文化の担い手でもある。言語行動は、所属している社会に根ざしているルールや規範などと緊密につながり、文化の側面もある程度表している。したがって、言語行動の対照研究を行うことで、その社会の文化の側面も観察できる。これまで言語行動の対照研究は、数多くの分野で行われてきた。例えば、不同意の表明、ほめの表現、不満表現、勧誘表現など、話し手の意思を伝達する多数の言語使用が対照研究の分野で扱われている。

「感謝」も普遍的な言語行動の一つとしてよく研究されている。感謝の言語行動はどの国の言語にも存在し、日本語や中国語も例外ではない。どの文化圏でも、感謝の表現を適切に使うことで、よりよい人間関係を維持することができる。これまでの研究の中で、日本語における感謝の研究と、日本語と他言語における感謝の研究が数多く行われてきた。その中でも、感謝の気持ちを表す際の、「感謝表現」と「謝罪表現」の選択に絞って行われた研究が大半を占めている。

日本語における感謝の言語行動に関わる研究の中では、謝罪表現が感謝場面で使用されることがよく論じられている。先行研究の多くは利益と不利益、補償方法、感謝と謝罪の交替、負の意識などの視点から、感謝場面での謝罪表現の研究を行っており、これらの研究は、このような謝罪表現を感謝場面の表現の一つとして捉えている。このような言語現象は、すべての感謝場面で有効というのではなく、社会的役割に相当する行動に対する感謝の場合は、謝罪の言語行動をとらないと指摘されてきた。また、日本社会では「再度の感謝」が頻繁に使用されているのに対して、中国語ではあまりないと指摘されてきた。対照研究の中で、特に日中両言語の対照研究では、感謝場面の差が一定の程度で明らかになっているが、感謝場面で謝罪表現がどのように使用されているか、どのような形で存在しているか、及びなぜ単独の謝罪表現が日本語にはあるが、中国語にはないのかという課題が依然として未解決の状態になっている。

本論文は日中両言語における感謝の言語行動のストラテジーとその特徴について対照研究を行う。さらに、詳細な研究のなかった「再度の感謝」について考察する。日中両言語の言語行動の対照研究は互いの言語学習者に日中両言語の共通点と相違点をより詳しく認識させると同時に日中両言語の背後にある文化をも理解させる一助としたい。加えてこの対照研究を通じて、感謝の言語行動の普遍性につながるような枠組みを考える。

各章の構成は以下の通りである。第一章では、研究の背景と目的に言及する。第二章では、研究の枠組みである、言語行動の対照研究、配慮コミュニケーションなどの理論的な背景を概観する。また、「感謝の言語行動」の定義及び種類などの特徴を概述し、本研究で扱う「感謝の言語行動」を定義する。さらに、日本語の感謝表現やその言語行動に関わる研究、日本語と他言語との感謝表現やその言語行動に関わる対照研究、及び「再度の感謝」に関する従来の見解について概観する。最後に感謝の言語行動に関する先行研究をまとめ、その成果と課題を踏まえ、本論文の研究課題を提示する。第三章では、先行研究に基づき、研究課題を解決するための本研究の研究方法与データ収集について述べる。また、採取したデータを整理し、感謝の言語行動における表現のバリエーションをまとめ、分析を行う。また、第三章では、収集したデータに基づき、日本語と中国語における感謝の言語行動の特徴を考察する。第四章は、感謝の言語行動に関する枠組みを提案して、第三章で収集したデータをこの枠組みの下で分析、考察する。第五章は「再度の感謝」を取り上げ、「再度の感謝」と「その場の感謝」との相関、「再度の感謝」に関与する要素などを明らかにする。また、「再度の感謝」と鏡像関係にある「事前の感謝」についても触れる。

本論文は、日中両言語における感謝の言語行動の使用表現を収集する際に、テレビドラマのセリフを研究データとして、感謝場面の表現のバリエーションを考察した。また、日中両言語において、謝罪表現の感謝場面での使用を解明するために、表現を「感謝型表現」、「謝罪型表現」、「その他の表現」、「混在型表現」に分類した。データの分類から、従来の研究で「中国語の感謝場面で単独の謝罪表現の使用はない」という指摘はある程度正しいが、謝罪表現を含む「混在型表現」の使用が中国語にあることが明らかとなった。

データを分析し、日中両言語の感謝表現の特徴を考察したあと、「感謝の言語行動に関する枠組み」を提案した。まず、「話し手S、聞き手H」を設定して、両者の「プラス（＝利益）」と「マイナス（＝不利益・負担）」を（＋）（－）の記号で示す。また、「話し手の行為によってもたらされた状況」と「聞き手の行為によってもたらされた状況」を、それぞれ[S]と[H]で示す。以上の状況で、「SはHに対して、（＋）と（－）を意識して、何らかの言語行動を行う」という前提条件を設定し、八つの可能な組合せを設定した。

典型的な感謝の言語行動の適用図式は「S（＋），[H]（＋）」と「S（＋），[H]（－）」であり、謝罪の言語行動の適用図式は「[S]（＋），H（－）」と「[S]（－），H（－）」である。従って、感謝の言語行動は、少なくとも「S（＋）と[H]」という要素、そして、謝罪の言語行動は、少なくとも、「[S]とH（－）」という要素が必要であることを指摘した。さらに、言語行動においては、状況把握のための全体的・固定的な側面と、個々の発言の背景にある個別的・流動的な側面があることを主張した。すなわち、言語化においては、それぞれの組み合わせ内の一部の要素のみに注目するという視点が必要であると提案した。

上記の抽象化した枠組み・図式と個別的・流動的な側面を示す記号を導入することで、従来気づかれなかった現象も浮き彫りになった。まず、日本語でも中国語でも感謝の場面では、「{S（＋）}，[H]（－）」という注視が可能であり、それが謝罪表現として言語化することによって、両言語の感謝場面で謝罪表現が用いられる事実を説明することが可能となった。さらに、感謝場面にとって必須の「S（＋）」という要素の言語化に関する制約によって、日本語の「すみません」と中国語の「不好意思」の単独使用に関する差が説明できる可能性について指摘した。

さらに、日本語の「すみません」（「謝罪型表現」）と「ご迷惑」類と「お疲れ、ご苦労」類と、中国語の“麻烦”“辛苦”“問責”“破费”類の表現が、同一の図式（{S（＋）}，[H]（－））で解釈できるという事実や、「ご迷惑をおかけしました」と“给你添麻烦了”が「すみません」に類似する機能をもち、単独で使用されても問題ないという事実も指摘し、日本語対中国語という全体的なレベルではなく、個々の表現に則した細かな比較が必要であることを強調した。

また、「その場の感謝」の延長線に位置する「再度の感謝」は、「感謝型表現」・「プラス指向表現」と同様、同一の図式で解釈できる。しかし、「再度の感謝」の注目条件が時間の流れとマイナスの回避などの影響を受け、「その場の感謝」と異なる特徴があると考えられ、本研究では、「再度の感謝」に関する研究データはテレビドラマのセリフからの入手が難しいため、アンケート調査を行い、データを収集し考察することにした。考察した結果、“①「その場の感謝」と「再度の感謝」の間に、頻度の相関性は存在しない。②一般的には、行為をしてもらった人の利益が、大きければ大きいほど、「再度の感謝」をする傾向が強くなる。③個人的付き合いのある相手の場合は、相手との「社会的距離」が大きければ大きいほど、「再度の感謝」をする傾向が強くなる。個人的付き合いのない相手の場合は「再度の感謝」は生じにくい。④中国語において、「再度の感謝」は存在しているものの、使用頻度は日本語より低い。⑤「再度の感謝」の表現について、日本語においては「先日はありがとう」というような慣用表現がよく用いられる。中国語においては慣用表現が定着しておらず、「再度の感謝」表現のバリエーションが豊かである”ということが明らかになった。

（中国語要旨）

対照言語学は通過语言和语言的对照研究来弄清各自的语言特性，也是研究语言本质的语言学的一个领域。对照研究是主要关于各自语言的语音和音韵、文法、词汇、语言行动等的研究。其中，语言行动的对照研究作为对照语言学领域重要的一环倍受瞩目。

语言行动不仅是传达信息的工具还是文化的载体。语言行动，与根植于其所属社会的规则和规范等紧密地相连，某种程度也表达着文化的侧面。因此，通过进行语言行动的对照研究，可以看到社会的文化侧面。关于语言行动的对照研究，在许多领域开展。譬如，传达不同意的表示，赞扬的表达，不满的表达，劝诱的表达等等。

“感谢”作为普遍的语言行动之一也被广泛研究。感谢的语言行动无论在哪个国家的语言中都存在，日语和汉语也不例外。无论在哪个文化圈，恰当地使用感谢的表达，都能保持良好的人际关系。先行研究中，有许多关于日语的感谢的研究、日语与其他语言的感谢的对照研究。其中，围绕“感谢表达”和“谢罪表达”的研究占多数。

在日语的感谢语言行动研究中，谢罪表达在感谢场面的使用倍受关注。许多先行研究是从利益和不利，补偿方法，感谢和谢罪的交替，负的意识等视点，进行感谢场面谢罪表达的研究。在这些研究中，谢罪表达被理解为感谢场面的表达之一。然而，这种语言现象并不是在所有的感谢场面中有效，对于某种社会职能的行动的感谢，一般不使用谢罪表达也被指出。还有，在日本社会“再次感谢”频繁的使用，在中国却很少见。对照研究，特别是日中两语言的对照研究中，感谢场面的不同点已经在一定的程度上被弄清，不过，在感谢场面谢罪表达怎么使用，以怎样的形式存在，以及为何日语中有单独的谢罪表达，汉语中却没有这样的表达等课题依然亟待解决。

本论文在关于日中两语言的感谢语言行动的方法以及特征方面、以及对尚未有详细研究的“再次感谢”进行考察。日中语言行动的对照研究能够使彼此的语言学习者更清楚地认识日中两语言的共同点和不同点的同时，也对学习者理解日中两语言背后的文化有一定帮助。此外，通过此对照研究，也可考察与感谢的语言行动的普遍性相关的框架。

关于各章中的内容，第一章阐述研究的背景和目的。第二章概述研究的框架、语言行动的对照研究、配慮交际等理论背景。还有，概述“感谢的语言行动”的定义及种类等特征，对本论文所考察的“感谢的语言行动”进行定义。并对“日语的感谢表达和相关语言行动的研究”，“日语和其他语言感谢表达和语言行动的对照研究，以及“再次感谢”的先行研究中的见解进行概括。最后，总结感谢的语言行动的先行研究，以先行研究成果和课题为背景，提出本研究的研究课题。在第三章中，基于先行研究，为解决研究课题，对本研究的研究方法及数据采集做出说明。还有，整理收集的数据，对感谢的语言行动的表达多样性进行总结和分析。根据收集的数据，考察感谢的程度的表示、亲切度的表示、感谢的回答等日语及汉语感谢的语言行动的特征。第四章，提出与感谢的语言行动相关的框架，在这个框架下分析，对第三章收集的数据进行考察。在第五章中将“再次感谢”和“当场的感谢”的相关，“再次的感谢”相关要素等进行考察分析。还有，作为“再次感谢”的反面的“事前的感谢”进行简单地考察。

本论文在收集日中两语言的感谢语言行动的使用表达时，把电视剧的台词作为研究数据，考察感谢场面的表达的多样性。为了弄清楚在日中两语言中谢罪表达在感谢场面的使用，将数据分为“感谢型表达”、“谢罪型表达”、“其他表达”、“混合型表达”。从数据的分类可以判断，先行研究中“汉语的感谢场面没有单独谢罪表达使用”这个观点在某种程度上是正确的，不过在汉语中有包含谢罪表达的“混合型表达”的使用却是事实。

分析数据，考察日中两语言的感谢表达的特征以后，提出“有关感谢的语言行动的框架”。首先，将说话人定义为S，听话人为H，再将两者的「正(=利益)」和「负(=不利·负担)」用(+)和(-)的记号来表示。还有用[S]と[H]分别表示“由说话人的行为带来的状况”和“由听话人的行为带来的状况”。S对H，有(+)和(-)的认识并进行某种语言行动。在以上前提下，可以设定八个组合。

典型的感谢语言行动的适用图表是「S(+), [H](+)」と「S(+), [H](-)」，谢罪的语言行动的适用图表是「[S](+), H(-)」と「[S](-), H(-)」。因此，可以指出，「S(+), [H]」是感谢的语言行动的必要要素，「[S]とH(-)」是谢罪的语言行动的必要要素。也可以进一步认为，在语言行动中有把握状况的全部的·固定的侧面和在各个词语背景下的个别的·流动的侧面。即，可以提出，在语言化中只对组合中一部分要素关注的视点是很必要的。

由于导入上述的抽象化了的框架·图表和表示个别的·流动的侧面的记号，以前尚未注意到的问题也突显出来。首先，无论日语还是汉语，在感谢的场面，都可能会注目「{S(+)}」，[H](-)」这个要素，通过这要素作为谢罪表达的语言化，可以说明在两语言的感谢场面中谢罪表达都可以使用的事实。并且，也可以指出，通过对感谢场面来说所必须的「S(+)」这个要素是否有义务进行语言化的制约，可以解释日语的「すみません」和汉语的「不好意思」的单独使用上的不同。

最后，位于“当场的感谢”延长线上的“再次感谢”，与“感谢型表达”“正指向表达”同样，可以用同样的图表解释。可是，「再次感谢」的关注条件受到时间的流动和对负面的回避等影响，可以想像与“当场的感谢”有着不同的特征，在本论文中，由于“再次感谢”的研究数据从电视剧的台词中不易收集，所以进行问卷调查，收集数据考察。其结果是，①“当场感谢”和“再次感谢”之间，不存在频度的相关性。②一般来说，说话人得到利益越大“再次感谢”的倾向就越强。③对于有个人的交往的对方，与对方的“社会距离”越大“再次感谢”的倾向也越强。对于没有个人交往的对方难以产生“再次感谢”。④在汉语中也存在“再次感谢”，不过使用频率较比日语低。⑤对于「再次感谢」的表达，日语的“先日ありがとう”作为惯用表达经常被使用，但在汉语中作为惯用表达却没固定下来，“再次感谢”表达也很丰富。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (李 華 勇)			
		(職)	氏 名
論文審査担当者	主 査	教授	岸田 泰浩
	副 査	教授	鈴木 睦
	副 査	教授	杉村 博文
	副 査	准教授	今井 忍
	副 査	同志社大学・教授	沈 力

論文審査の結果の要旨

審査対象論文は日本語と中国語における感謝の言語行動のストラテジーとその特徴について論考したものである。日中両言語における類似点と相違点を示すだけでなく、感謝の言語行動の普遍性につながる枠組みの提案を試みた点、さらに、従来、詳細な研究がなかった「再度の感謝」（過去の利益を受けたことに言及し、再び感謝する言語行動）に関して緻密な分析を行った点に、従来の研究とは異なる斬新性を認めることができる。

第一章で研究の背景と目的を提示した後、第二章では、対象論文の研究課題として次の4点を提示した：①日中両言語の感謝の言語行動にどのような表現上のバリエーションがあるか、②日中において謝罪表現はどう使用されているか、③「再度の感謝」の成立条件や制約、④日中における感謝の言語行動の差に関わる要因の解明。これらの課題は、先行研究において十分な検討がなされているとは言えず、対象論文で多くの点が明らかにされたと言っても過言ではない。

第三章では、感謝場面における表現のバリエーションを調査するために（課題①）、日中のテレビドラマ（各々2387分と2063分）から得た感謝場面の表現を「感謝型表現」、「謝罪型表現」、「その他の表現」、「混在型表現」に分類し、その使用割合を調べた結果、(1)「感謝型表現」は日本語よりも中国語のほうが使用率は高い、(2)「その他の表現」は日本語のほうが使用率は高い、(3)日本語と異なり、中国語では、感謝場面において謝罪型表現が使用されることがない、ということが浮き彫りにされた。(3)は、従来、指摘されてきたことであるが、大量データに裏付けされたその主張は説得力がある。さらに、「感謝型」と「謝罪型」の単純定型表現に加え、「その他の表現」（非定型型）と「混在型」の類を設定することによって、(4)中国語でも日本語と同じく謝罪型表現を含む混在型の表現が同程度見られるという事実を新たに明らかにした点（課題②）は、きわめて重要な発見と言ってよい。第四章では、対象論文の主要な提案の一つが披露されている。第三章で明らかとなった感謝の言語行動における日中の差、特に(3)と(4)の背景にある要因を解明する（課題④）方法論として、感謝の言語行動に関する理論的枠組みが提案された。言語行動を分析するために必須の要素として、参与者「話し手S、聞き手H」、利益・不利益「+、-」、行為者「話し手側S、聞き手側H」の三要素を導入し、8つの基本的な言語行動の「場面」を想定した。この枠組みによって、典型的な感謝場面は「S(+), H(+/-)」、謝罪場面は「S(+/-), H(-)」という要素から成り立っていることだけでなく、前者にとって「S(+)とH」が、そして、後者にとって「SとH(-)」が言語行動を誘発する基盤要素であることを簡潔に示すことを可能にした点は、言語行動の研究に対する大きな貢献である。加えて、言語行動においては、状況把握のための全体的・固定的な側面と、個々の発言の背景にある個別的・流動的な側面があり、言語化においては、場面が持つ要素の一部のみが個別的・流動的に注視されるとする主張は、独特の観点として評価できる。これらの提案や主張をもとに、両言語ともに感謝場面で謝罪表現が用いられるという事実（第三章の(4)）のみならず、日本語の“すみません”と中国語の“不好意思”（すみません）の使用における相違点（第三章の(3)）が感謝の言語行動にとって基本となる「S(+)」という要素を義務的に言語化するか否かに関する制約によって説明できることが論証され、同時

に当該の枠組みの有用性が示された。また、中国語において“不好意思”以外の謝罪表現、例えば、“给你添麻烦了”（ご迷惑をおかけしました）が、単独で感謝の言語行動に表れる事実を指摘し、日本語の“すみません”と中国語の“不好意思”の相違を両言語の謝罪表現全体に一般化するのは適切でないと結論づけたことも、その新規性において特筆すべき点である。

第五章では、「再度の感謝」に焦点をあて、「再度の感謝」と「その場の感謝」との相関や「再度の感謝」に關与する要素などを考察した（課題③）。その結果、(1)「その場の感謝」と「再度の感謝」の間に頻度の点については相関性が存在しない、(2)一般的に話し手が受けた利益が大きいほど、「再度の感謝」をする傾向が高くなる、(3)個人的付き合いのある場合は、相手との「社会的距離」が大きいほど、「再度の感謝」をする傾向が高くなる、(4)中国語においても、使用頻度は日本語より低い「再度の感謝」が存在する、(5)「再度の感謝」において、日本語では慣用表現が頻用されるが、中国語では慣用表現が定着しておらず、バリエーション豊かな表現が用いられることが明らかにされた。「再度の感謝」を詳細に分析した研究は既述のように少ない。それ故、アンケート調査で得られた貴重なデータとともに、これらの発見は、「再度の感謝」を研究するための礎を築いたと認められ、その功績は大きい。さらに、日本語と異なる側面があるものの、(4)と(5)によって中国語にも「再度の感謝」が存在することを詳らかにし、当該の言語行動が日本語に独特のものであり、中国語では感謝の言語行動として成立しないとする従来の見解に修正の契機をもたらした点も独創的な業績として高く評価できる。また、「再度の感謝」のいわば鏡像になる、中国語の「事前の感謝」（依頼場面で依頼された行為が実行される前に用いられる“谢谢”（ありがとう））の存在に言及したことも注目すべきであり、感謝の言語行動は「その場」に限定されず、「感謝」というものが言語行動の中で占める大きさを我々にあらためて認識させてくれる指摘である。

以上のことから、本審査委員会は、全員一致で対象論文が博士（日本語・日本文化）の学位を授与する水準に達していると判断し、合格との結論に至った。